

聖霊降臨日の典礼色には赤が用いられます。今日は礼拝堂の講壇掛けも赤になりましたが、この典礼色にちなんで多くの人がペンテコステ礼拝には赤い物を身に着けたりします。「情熱の赤」なんて言われますが、ペンテコステの赤も、ある意味情熱の赤です。けれどもそれは、私たちの情熱ではなく、神さまが私たち一人ひとりを生かしたい、新しい命に生きて欲しい、その情熱、熱情を持っておられるという意味での赤です。

イエス・キリストの死と復活の出来事によって祈って集まっていた弟子たちのもとへ聖霊が与えられる。それは、神さまの「生きよ」という情熱が与えられるということです。それが聖霊降臨の出来事です。

エゼキエル書 37 章には、エゼキエルが聖霊によってある谷に連れて行かれたことが記されています。その谷でエゼキエルは、おびただしい骨を目にしました。しかもその骨は枯れ果てていたというのです。見渡す限りに広がる骨の光景です。これはエゼキエルという預言者が見た幻のようなものであったと思われます。しかし、これはホラー映画みたいなものでも、ただの幻想でもありませんでした。それは紛れもない現実でした。

エゼキエルは聖霊の力によって現実の人の姿を見たのです。ここで枯れた骨と言われているのは、本当に亡くなった人たちの骨が一面に重なり合っていたというのではありません。ここにあるのは生きた人たちの姿です。けれども、生きて生活しているにもかかわらず、まるで枯れた骨のような人たち。エゼキエルの目の前にいた人たちは、そういう人たちでした。

エゼキエルが生きた時代、イスラエルはバビロニアとの戦争に敗れ、神殿は焼き払われ、国は崩れ去りました。哀歌には、「女がその胎の実を／育てた子を食い物にしているのです。」（哀歌 2：20）という言葉さえあります。エルサレムは兵糧攻めにあって、市中にいた人たちは食べ物が全く無くなりました。人々は飢えて死んでいく。母親が自分の子に手をかけるようなことさえ起こってきたということが記されているのです。

若くしてエルサレムの祭司となったエゼキエルは、捕囚民としてバビロンへ強制連行された一人でした。そのエゼキエルが聖霊に導かれて見たものは、明るい素晴らしい光景ではありませんでした。破れてあり、終わりでした。一面に広がる枯れた骨は、エルサレムからバビロンに連れてこられたイスラエルの民の姿でした。選ばれた民、神の都エルサレムに住む者、そういう自分たちのアイデンティティすべてが奪われてしまった。破れてしまった。人としての尊厳もなく、彼らは生きる望

みが潰え、枯れ果ててしまっていたのです。箴言には、「たましいの憂いは骨を枯らす」（箴言 17：22 口語訳）と記されています。骨が枯れていたというのは、捕囚の民の苦悩の深さを示しているのでしょう。ここにあるのは死の勝利です。

今日の箇所 11 節にイスラエルの嘆きの言葉がそのまま記されています。「我々の骨は枯れた。我々の望みはうせ、我々は滅びる」。これが民族と社会の姿でした。エゼキエルは聖霊に満たされて現実を直視しました。枯れた骨の幻とは、幻想ではありませんでした。それどころか、表面的には毎日の生活をどうにかやり繰りして生きているけど、実際には、望みが消え果て、何のために生きていくのかをもはや全く見失っている人々の姿でした。

聖霊によって見させられるのは、そういう私たちの、また社会の破れ、痛みだと思えます。でも、それだけではない。ここでエゼキエルは、神さまから「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか。」と問われています。その問いにエゼキエルは、「主なる神よ、あなたのみがご存知です。」と答えています。この言葉の中にあるのは、人間は限界を抱えているということです。「しかし、主よ、あなたご存知です」、あなたが望まれるなら、枯れた骨のような人々も生き返るでしょう。そう言うのです。

聖霊の働きは生かす働きです。今日の箇所に「霊」という言葉は 10 回出てきますが、そのうちの 5 回は「生きる」という言葉と結びついています。聖霊は殺された者を生かす、絶望の淵にいる者を生かす、破れ果てた民族を再び立ち上がらせるのです。

あなたに生きて欲しい、それが神さまの情熱です。あなたがどれほど望みを失い、枯れた骨だと言っても、あなたを生かそうとしている方がおられる。それが聖霊によって与えられる力ではないでしょうか。その聖霊の力によって骨と骨はつながる。人は群れになります。そして民として再生されていくのです。聖霊は私たちをつなげてくださいます。そのことによって祈る者とさせてくださいます。私たち一人ひとりにはなし得ないと思っている業を、つながり合うことによってなし得させてくださいます。

私たちの世界は、この世界を生かす霊に満たされている。それが私たちの希望です。そのことをしっかりと心に刻んでまいりたいと願います。そして、破れの中で働かれる神さまを待ち望みつつ、また神さまが私のことも用いてくださることを待ち望み、その器とさせていただきたいと願います。